

目指せ!サブカルの聖地

～静岡県立図書館はあなたの推し活を応援します～

【提案理由】

これまでの公共図書館の蔵書は公共性を重んじるあまり『ハイカルチャー』に偏りがちな資料収集だったことは否定できません。

しかし、『サブカルチャー』と呼ばれてきた大衆文化は既に市民権を得ました。人々が、自分の好きな漫画、アニメ、アイドル、声優、ミュージシャンなどを『推す』行為による経済効果は行政も積極的に取り入れざるを得ない規模となっています。

人々の興味は多様化し、市民に一番身近な存在である市町の図書館ではカバーしきれないほど多岐に渡ります。限られた予算の中、住民の細分化した興味に踏み込んだ資料を集めることは、市町の図書館には難しいのではないのでしょうか？

しかし、細分化したジャンルも、静岡県民全体に目を向ければ、利用者の分母が大きい分、求める人数が増え、可能になります。貸出方法やレファレンスサービスの提供方法も進化した今、市町図書館の先頭を行く資料収集をすることこそ、県立図書館なら可能なのではないかと考えます。

今こそ、サブカルチャーといえば「静岡」というブランドづくりの一步として、静岡県立図書館に来れば、マニアックで面白く、楽しい資料に出会えるための資料収集に力を入れることを提案します。

【なぜサブカルチャーなのか？～静岡県とサブカルチャーの親和性～】

【東静岡駅とガンダム】

県立図書館の新設予定地である東静岡駅は既にサブカルチャーの聖地となった歴史があります。2010年の実物大ガンダムの登場です。巨大ガンダムを目指して全国からファンが訪れたことは県民の記憶に新しいところです。今でも多くのファンのブログなどにその熱狂が記録されています。ただ、これは「ホビーショー」の企画だったため、期間限定でした。しかし、ガンダムを製造するバンダイの工場は今でも東静岡に存在します。東静岡とサブカルチャーは切っても切れない縁で結ばれているのです。

【ラブライブ!で沼津が人口増加】

2020年6月22日付の中日新聞webには、『昨年の沼津市の転入者数が、三十七年ぶりに転出者数を上回った。その一因と考えられるのが、同市が舞台のアニメ「ラブライブ! サンシャイン!!」を愛するあまり、故郷や仕事を捨てて移住してきたファン「ラブライバー」たちの存在だ。』という記事があります。サブカルの代表格であるアニメに登場する町はファンに『聖地』と呼ばれ、観光にとどまらず、移住のきっかけにすらなるのです。テレワークが普及したアフターコロナの日本ではこのような移住はさらに加速するでしょう。そんな聖地が静岡県にはすでに存在しています。静岡とサブカルチャーは親和性が高いと言えるのではないのでしょうか。



「ラブライブ!サンシャイン!!」聖地の沼津市移住について話す(左から)馬場佑希さん、杉山太一さん、太田鉄平さん、鈴木慎さん=沼津市のはなぼんで

2020年6月22日 中日新聞webより

【今の県立図書館の収集状況】

では、今の県立図書館におけるサブカルチャーの位置づけですが

公式サイトに掲載されている方針によると

新聞雑誌の収集方針について

図書の蔵書構成を考慮しながら、全分野にわたって資料性の高いもの、学術的なもの及び同時代性を反映するものを収集しています。

とあります。公共図書館として非常に正しい方針です。

しかし、県立図書館は学術的なものに興味がある、高尚な興味を持つ、文化度が高い人たちのためだけに存在すれば良いのでしょうか？そうであるならば、むしろサブカルチャーは捨てて、高尚な文化のみに特化するのも良いかもしれませんが、それはどこの公共図書館でも既にやっていることです。このまま続けても面白くありません。新生静岡県立図書館ではどちらかに突き抜ける必要があります。

一例として今の県立図書館における音楽関係の雑誌を調べてみると・・・

クラシック音楽の蔵書は見られますが、大衆音楽関係は少なく、ないに等しいのが現状です。音楽にはロック、ポップス、演歌など様々なジャンルが存在するにも関わらず、ハイカルチャーへの偏りは否めません。

【「推し活」支援が売りになる理由】 推し活って何？

『推し』とは、自分が愛するもの

『推し活』とは、その「推し」のために活動、あるいは生活すること

明確な定義はないものの、『推し活』という言葉は消費行動の大きな動機付けとなっていることは下記調査結果からも明らかです。

株式会社ジャストシステム が2020年5月1日に行った『推し活と消費に関する実態調査』によると15歳から49歳の男女624人中、「推し活」をしている人の約7割に商品やグッズの購入経験があり、聖地巡礼の経験がある人は約3割に登った。

とあります。聖地巡礼の究極の形は先に述べた沼津の移住の例ですが、もっとライトな推し活としては自分の好きな対象の情報収集があります。特に俳優やアイドルなどを推している場合、短期間に多くの雑誌に露出することがあります。しかし、それら全てに目を通したいファン心理に反し、書店が近隣になくなった地域で実際に書籍を手にとって購入するハードルは非常に上がります。しかも、雑誌は限られた期間に購入する必要があり、個人が資料を収集するのはなかなか大変です。

そこで、図書館が担える『推し活支援』とは言うまでもなく、雑誌や出版物の収集ということになります。

静岡県立図書館は『推し活』をサポートします!!

と胸を張って資料を集めることは必ずや新生県立図書館の大きなセールスポイントとなるでしょう。



【サブカルチャーに特化するメリット】

この提案のメリットは、まだサブカルチャーに特化すると宣言している公共図書館が見当たらないからです。

現在、明治大学には「まんがとサブカルチャー」に特化した附属図書館が存在します。しかし、まだ公共図書館、特に県立図書館では、筆者調べでは見つけれませんでした。



サブカルチャーの聖地と呼ばれる場所の多くは都会に存在します。人口が多い=マニアの数も多いのが理由と考えられますが、しかし、それは都会の特権なのでしょう？サブカルに特化した公共図書館がまだない今、特化すると宣言することで注目を集めることは間違いありません。ただし、突き抜ける必要はあります。途半端では「売り」になりません。せっかく「東静岡駅」に移転するのです。移転を機に、これまでの概念を捨てて、振り切った資料収集をしてみませんか？

【貸出方法の工夫】

最後に、利用者を増やすための提案をします。



使いやすいスマホ専用アプリの開発と、遠方でも予約が簡単に出来、直接受け取れるシステムは必須でしょう。自宅で出来るオンライン検索の便利さを周知する必要があります。

今までの県立図書館を利用しにくかった東部・西部地区の住民や、移動が困難なお年寄り、書店が減少している地域の皆さんが、簡単に借りられる仕組み作りが必須です。

例えば、フリマアプリの運営会社が高齢者向けに自社アプリの操作教室を開いているように、各地の生涯学習センターなどを利用し、図書館のネット予約システムの教室を開くことも提案します。マニアックな資料をより多くの人に利用してもらうには、利用者の分母を増やす必要があるからです。

趣味の本は市町の図書館で借りればよいという棲み分けの意識をなくし、県立図書館が率先してサブカルチャーの資料を集めることで、市町は別の資料収集が出来る可能性も広がります。

また、これまでの検索システムのように自分で検索するだけでなく、県立図書館の司書にLINEを通じて直接質問出来る仕組み等があれば、ウィズコロナ時代の新たなレファレンスサービスになるだけでなく、遠方の人のアクセスも容易になります。



サブカルを入りに、図書館の敷居を低く、県民の毎日が潤い、楽しくなるためのサービスを提供できる県立図書館を目指しましょう!!